

CORRIGENDA

津田明雅

『Catuḥstava とナーガールジュナ – 諸著作の真偽性』

27 / Jan. / 2006 版に対する訂正

2 / Sep. / 2009 作成

p.1.32: *Dvādaśakāra nāma nayastotra*

→ *Dvādaśakāra-nāma-nayastotra*

p.2.6: I. *Mūlamadhyamakakārikāḥ*

→ I. *Mūlamadhyamakakārikā*

p.8.12: 4. *Mūlamadhyamakakārikāḥ*

→ 4. *Mūlamadhyamakakārikā*

p.22.note92: *Akāṛīṭikā*,

→ om.

p.24.10–11: 注釈書のタイトルは *Akāṛīṭikā*。その他の情報は

→ om.

p.24.15: (挿入)

→ なお、従来この注釈書のタイトルは、奥書きにみられる “*Akāṛīṭikā*” とされてきたが、*akāri* は動詞 $\sqrt{kṛ}$ -のアオリストの受身形であって、この個所は ‘*akāri ṭikā*’ (注釈が作られた) と読むべきである。この点は斎藤明氏によりご指摘いただいた。ここに深く感謝したい。

p.24.20: *Akāṛīṭikā*

→ Commentary

p.25.23: *akāri-ṭīkēyam*

→ *akāri ṭīkēyam*

p.25.note10: // ○○ // Ms

→ // ○○ // // Ms

p.25.note11: -ṭī○kê- Ms

→ ṭī○kê- Ms

p.25.29: この *Akāṛīṭikā* (『A という文字をもつ注釈』?) はこの上なく最高であり、

→ この上なく最高であるこの注釈が作られた。

p.26.26, 31; p.27.19, p.28.1: *Akāṛīṭikā*

→ CS 注釈

p.43.13–14: 瑜伽行派の『解深密經』であり、それはその後「人法二無我」として体系づけられていく。

→ 瑜伽行派の最初期の文献である『解深密經』や『瑜伽師地論本地分菩薩地』からであり、それは「人法二無我」として体系づけられていくもの、あるいは体系づけられたものである。

p.45.21–25: *SL* では、第 48 偈で「人間 (*mi*) は真実としては我がない (*bdag med*)」と説かれ、続く第 49 偈では「我 (*bdag*)」と「物質 (*gzugs*)」との関係を代表として「五蘊 (*phun po*) の空」が説かれる。これら 2 偈では、直接的ではないけれど、人無我と法無我に通じる考え方が説かれているようにみえる。

また第 58 偈には「この世のすべて ('di kun) は無我である (bdag med)」という法無我に通じる記述もみられる。

→ SL では、第 48 偈で「真実としては我がない (bdag med)」と説かれ、続く第 49 偈では「我 (bdag)」と「物質 (gzugs)」との関係を代表として「五蘊 (phun po) の空」が説かれる。これら 2 偈では法無我に通じる考え方が説かれている。また第 58 偈にも「この世のすべて ('di kun) は無我である (bdag med)」という法無我に通じる記述がみられる。

p.46.16-17: ところで、瑜伽行派の「最初期の文献である解深密経では、人無我とも空ともいわず、単に法無我というのみであった」ことは注目に値する。

→ ところで、「解深密経は究極の真理たる勝義諦を法無我と規定する。のちに護法系統の唯識説では、人法二空所顕の真如というのであるが、少くとも最初期の文献である解深密経では、人無我とも空ともいわず、単に法無我というのみであった」ことは注目に値する。

p.46.note178: 勝呂信静 (1964) p.555.5-6.

→ 勝呂信静 (1964) p.555.4-6.

p.46.22-23: さらに、法無我のみがみられるという点も、As と共通している。

→ om.

p.50.33: CS の注釈書のうち *Akāṛitkā* (T) の読みを

→ CS の注釈書 (T) の読みを

p.54.note195, 196; p.55.note203: Wogihara, U. (1971)

→ Wogihara, U. (1936)

p.67.note368: 荒牧典俊 (1976), 荒牧典俊 (1976)

→ 荒牧典俊 (1976*), 荒牧典俊 (1976**)

p.69.22: *Akāṛitkā*

→ (T)

p.118.13: na pīta-kṛṣṇa-śuklo

→ na pītaḥ kṛṣṇa-śuklo

p.118.note29: pīta-kṛṣṇa-śuklo T kār / pītaḥ kṛṣṇa-śuklo (T ṭik) / pītaḥ kṛṣṇaḥ śuklo Lindtner's edition / pīto kṛṣṇa-śuklo W

→ pītaḥ kṛṣṇa-śuklo Tucci's edition, (T ṭik) / pīto kṛṣṇa-śuklo W / pīta-kṛṣṇa-śuklo T kār / pītaḥ kṛṣṇaḥ śuklo Lindtner's edition

p.132.10, 13, 15, 17: [身体の]

→ [人間の]

p.160.right37: -kṛṣṇa-śuklo

→ kṛṣṇa-śuklo

p.165.right27: pīta-kṛṣṇa-

→ pītaḥ

p.181.2: *Akāṛitkā* of the *Catuhstava*

→ *Catuhstava-ṭikā*

p.181.4: *Akāṛitkā*(T)

→ *Catuhstava-ṭikā*(T)

- p.181.23, 27, 28: daṇḍa
→ daṇḍa
- p.182.1: (*Akārīṭikā* of the *Catuḥstava*)
→ (*Catuḥstava-ṭīkā*)
- p.249.6: na pīta-kṛṣṇa-śuklo
→ na pītaḥ kṛṣṇa-śuklo(脚注追加)
(脚注) pīta-kṛṣṇa-śuklo Ms
- p.253.15: akārī-ṭīkēyam
→ akārī ṭīkēyam
- p.254.note309: -ṭī○kê- Ms
→ ṭī○kê- Ms
- p.255.1: (『A という文字をもつ注釈』)
→ (『*Catuḥstava* 注釈』)
- p.288.44-45: この *Akārīṭikā*(『A という文字をもつ注釈』?) はこの上なく最高であり、
→この上なく最高であるこの注釈が作られた。
- p.290.7-8: *Dvādaśakāra nāma nayastotra* (P no.2026)
→ *Dvādaśakāra-nāma-nayastotra* (P no.2026)
- p.290.14-15: *Ratnāvalī*(*RA*) V-65 でも、それ以降に挙げられる 20 偈の讃歌を仏像や仏塔などの前で毎日 3 度唱えることを勧めている。
→ om.
- p.292.29: *BS* 113, 117
→ *BS* 113, 117, 152, 153(脚注追加)
(脚注) *BS* の場所は順に、大正 1660, pp.536c5-6, 537a3-4, 539c29-540a1, 540a6-7.
- p.297.note58: 梶山 (1977)
→ 梶山雄一 (1977)
- p.298.note64: Wogihara, U. (1971) (* 2 箇所あり)
→ Wogihara, U. (1936)
- p.300.2: *Kāyatrastotra nāma vivaraṇa*
→ *Kāyatrastotra-nāma-vivaraṇa*
- p.303.18: 5. Kāśī, (Kanyākubja?), 諸天の降下
→ 5. Sāṃkāśya, (Kanyākubja), 忉利天から降下
- p.305.24: *Dvādaśakāra nāma nayastotra*
→ *Dvādaśakāra-nāma-nayastotra*
- p.305.30: カーシー (Kāśī)
→ サーンカーシュヤ (Sāṃkāśya)
- p.306.note113: Hahn, M. (1987)
→ Hahn, M. (1987)
- p.307.19: *Dvādaśakāra nāma nayastotra*
→ *Dvādaśakāra-nāma-nayastotra*

- p.309.22: P no.2026 *Dvādaśakāra nāma nayastotra*
→ P no.2026 *Dvādaśakāra-nāma-nayastotra*
- p.317.16: mkhas kyi
→ kham s kyi
- p.317.note120: mkhas P, N, C, S / kham s D
→ kham s D / mkhas P, N, C, S
- p.322.12: あらゆることに全く無知であれば三種の存在を
→ [それを命あるものが] 全く知らなければ三種の存在を
- p.322.15: 法界
→ 法身
- p.323.4-5: 諸々の時、あらゆるところで煩惱は存在せず、
→ あらゆる時に煩惱は存在せず、
- p.323.6: 諸々の時、あらゆるところで光輝いているけれど、
→ あらゆる時に光輝いているけれど、
- p.324.6: 勝利者 [たち] によってありのままに説かれたところの、空性を説く [諸] 經典、
→ 勝利者 [たち] によって説かれた、空性を説くあらゆる經典、
- p.324.9: 法界は無我であるから、
→ 法界は我ではないから、
- p.324.12: 欲望による盲目を制するために
→ 欲望によって盲目 [となっている人々] を導くために
- p.325.2: 愚者はどうして理解をするだろう。
→ 愚者はどのように構想 (妄想) するだろう。
- p.325.8: 我 (bdag)、我所 (bdag gi) を
→ 我 (bdag) や我所 (bdag gi) を
- p.325.9: 夏
→ 春
- p.325.14: よく
→ om.
- p.325.15: 認識 [があるが、その] 3 つは
→ 認識 [があるが、それら] 3 つは
- p.326.3: それぞれが自身の特徴を [もっている]。
→ これこそが真実 (de ñid) の特徴である。
- p.326.5: 心 (sems) そのものは2種考えられる。例えば、世間と出世間 [の人々に] は自我 (bdag) [がある]、
→ [人々は] 心 (sems) そのものを2種として見る。例えば、世間と出世間 [の人々の心であり、それぞれに] 自我 (bdag) [がある]、
- p.326.15: 見るとか見ないということがある。
→ 見るとか見ないということである。
- p.326.23: 32 相に輝く仏が、

- 32 の特徴に輝く仏が、
- p.327.8: 異教 (phyi rol) の賢者 (sems can mkhas) でさえ [そ] の無限の劫にわたる命もまた、
→ 異教 (phyi rol) の人々の世界 (khams) の無限の劫にわたる命もまた、
- p.327.22: 瑜伽行者の立場 (gnas)
→ 瑜伽行者の境地 (gnas)
- p.328.2: 力 (stobs) に対して、確立している知 (ye śes, *jñāna) [とがある]。
→ 力 (stobs) に対して確固としていること [と]、知 (ye śes, *jñāna) [とがある]。
- p.328.12: 諸々の引導者 ('dren pa)
→ 諸々の指導者 ('dren pa)
- p.329.5: まったく打ち克つために、
→ よく打ち克つために、
- p.330.19: ここでは涅槃そのものが無垢であると考えられる。
→ ここでは涅槃はまさに無垢の心である。
- p.330.25-26: ナーガールジュナによって作られたものを終わる。インドの学者クリシュナ・パンディタ (Kṛṣṇapaṇḍita) と翻訳僧シーラジナ (Śīlajina) によって翻訳された。
→ ナーガールジュナのお作りになったものを終わる。インドの学者クリシュナ・パンディタ (Kṛṣṇapaṇḍita) と翻訳僧ツルティムゲルワ (Tshul khrims rgyal ba) によって翻訳された。
- p.332.22: 師ナーガールジュナによって作られたものを終わる。
→ 師ナーガールジュナがお作りになったものを終わる。
- p.335.1: rgyun tu
→ rgyun du
- p.335.note257: tu P, N, C, S / du D
→ du D / tu P, N, C, S
- p.336.22: ナーガールジュナによって作られたものを終わる。
→ ナーガールジュナがお作りになったものを終わる。
- p.340.8-11:
1. 私に対する敬意は命あるものの利益であって、敬意は他の諸々 [に対するものではない] ない。
慈悲を投げ出さないような者によって、私に対して敬意が払われる。
慈悲を投げ出してとどまっている [けれど、この世間に] 降りてくる、
その者は、それから慈悲を与えることができるけれど、他のことによってではない。
→
 1. 私に対する敬意は命あるものの利益 [になるの] であって、他の [どんな] 敬意でもない。
慈悲を投げ出さない者によって、私に対して敬意が払われる。
慈悲を投げ出してとどまってしまう墮ちた者、
その者は、そこから慈悲によって [救い] 上げられるけれど、他の [どんなこと] によってでもない。
- p.340.12: 命あるものにつき従っているような、
→ 命あるものに結びついていてような、
- p.340.16: 利益するために、
→ 利益することによって、

p.340.18: 命あるものたちを考慮することで (manasā)

→命あるものたちを心によって (manasā)

p.340.19: その意味が説かれることはない。

→その者の利益が説かれることはない。

p.340.20-23:

4. 命あるものへの利益が小さいものであっても、それによって [ブッダへの] 敬意 (pūjā) が生じる。

それによって心を満足させる (manasi tuṣṭim) ような敬意である

傷つけるという自我をもった (himsātmika-)、あるいは他のものを 傷つける (vihetṭhana-)、

→

4. 命あるものへの利益が小さいものであっても、それによって [仏への] 敬意 (pūjā) が生じる。

それによって心を満足させる (manasi tuṣṭim) のが敬意を受ける者 (pūjyaḥ) であるから。

傷つけるという本質をもった (himsātmika-)、あるいは他のものを 傷つける (vihetṭhana-) ような

p.341.3: 受け取るならば、

→受け取るのだから、

p.341.4: 傷つける ('tshe bar byed)。ちょうど私の弟子 [を傷つける] ように。

→傷つける ('tshe bar byed) 者がどうして私の弟子であろうか。

p.341.5: 歓喜させられ (ārādhitāḥ)

→歓喜させられ (ārādhita-)

p.341.6: 生み出される (kṛtāni)。

→生み出される (kṛta-)。

p.341.9: 私はブッダである。

→私は仏である。

p.341.12: 拠り所とされたり (ālambyatām) 確立されたり (sidhyatām)

→拠り所とされたり (ālambyata-) 確立されたり (sidhyata-)

p.341.19: 利益 (arthah) が得られるのか。

→利益 (arthah) がなされるのか。

p.341.22: 利益が得られようか。

→利益がなされようか。

p.341.29: 『菩薩の蔵である塩の河』という經典から、

→『菩薩蔵 [經?]』『塩の河』という經典から、

p.347.9: 師ナーガールジュナによって作られたものを終わる。

→師ナーガールジュナがお作りになったものを終わる。

p.350.19: [身体の構成] 要素 (skandha)

→ [心身の構成] 要素 (skandha)

p.351.4-5: あるものが集合体 (sāmagrī) から成立したものならば、集合体は原因から生じると見られる。

それらのものは2つの極論

→集合体 (sāmagrī) から成立しているので [事物は] 集合体という原因から生じると見る人々、彼らは2つの極論

p.351.13: 存在として、

- 存在 (実在のもの) として、
- p.351.19: いる時、どのようにしても
→いるので、どのようにしても
- p.352.9: 様々なものや誤った見解の道に
→様々なものや [誤った] 見解の悪い道に
- p.352.12: それ以上理解することはありません。
→それ以上理解しようとはしない。
- p.353.14: gañ zig thañ la 'chi ba ltar //
→ gañ zig thañ la mchi ba ltar //
- p.353.note447: 'chi P, C, N, S / mchi D
→ mchi D / 'chi P, C, N, S
- p.354.20: 5. 虫の力によってあるものが平原において滅びるように、
→ 5. 螢の力によってあるものが平原を進むように、
- p.358.7, 9: 『聖なるマンジュシュリーの慈悲に対する讃歌』
→ 『聖なるマンジュシュリーの慈悲 [ある方] に対する讃歌』
- p.358.14: 私は苦しみを生じるけれど [苦しみが] 最も少ないのがあなたである。だから、どうして
→私は苦しみを生じるけれど [苦しみは] わずかである。あなたよ。どうして
- p.358.23: 行為なさるけれど、自らの喜びを見ず、ああ、苦し [んでいらっしゃる]。
→行為なさるけれど、私に苦しみを与えないことは、ああ、苦しい [ことでしょう]。
- p.358.24: あなたは心の恐れに一息つかせるけれど、
→あなたは心が恐れる [者たち] に一息つかせるけれど、
- p.359.7: 若者の側であるこちらにいらっしゃる。
→若者の [ような未熟な] 側であるこちらにいらっしゃる。
- p.359.17-18: そういうあなたは自我を捨て去っているので、福德 [の] 制圧された自我によって、
→そういうあなたが私を見放しているならば、福德 [の] 制圧された私 [となるの] だから、
- p.359.24: 私のためにあらゆるやり方で、どうしてとどまっていようか。
→私のために常にどうしてとどまっているのか。
- p.360.1: あなたの若者の身体において自我が生じ、
→あなたの若者の身体に私となり、
- p.360.3: 『尊い聖なるマンジュシュリーの慈悲に対する讃歌』
→ 『尊い聖なるマンジュシュリーの慈悲 [ある方] に対する讃歌』
- p.360.4: ナーガールジュナによって作られたものを終わる。
→ナーガールジュナがお作りになったものを終わる。
- p.363.2-3: 解脱 [への] 教えの輪 (dharmacakra) [を説いて]
→解脱 [を説く] 教えの輪 (dharmacakra) [を転じて]
- p.363.6-7: [において] 思いを最高に成就させ、
→ [において] ご意志を最高に成就された、
- p.363.8-9: カーシー (Kāśī) で、神々はこの上ない行き場に降りてきて、… 30 の天が称える

→輝かしい[街] (Sāṃkāśya) で、諸天の場所 (忉利天) に行った無上なものとして降下し、… 三十三天 (脚注追加) が称える

(脚注) チベット訳では三十天 (sum cu'i lha) となっているが、三十三天 (sum cu rtsa gsum lha) の間違いであろう。

p.363.13: 7. 寿命を全うした (捨てた) 後でも寿命に立脚して解脱した。

→ 7. 寿命の作用 (*āyuh-saṃskāra) をなげうって (捨多寿行) から後にも、寿命に恵まれ (留多命行 (脚注追加)) で解脱した。

(脚注) 釈尊が百二十歳の寿命を八十歳にちぢめたが、さらに三か月間寿命をのばしたこと: 『仏辞典』 p.1433.b.20-26.

p.363.15: 結び付けて、

→結び付けなさった、

p.363.18: 静けさに常に共に (?spyis) 礼拝します。

→静けさに常に頭 [を下げ] て礼拝します。

p.363.24: ナーガールジュナによって作られたものを終わる。

→ナーガールジュナがお作りになったものを終わる。

p.364.13: phyag gi ser

→ phyag gi sor

p.364.note552: ser P, C, S / sor D, N

→ sor D, N / ser P, C, S

p.364.15: ha lu mañju sa

→ ha lu ma ñdzus

p.364.note555: sbrañ / sprañ

→ sbrañ D, N, C, S / sprañ P

p.365.6: cundās

→ cundas

p.365.note564: cundās ego

→ cundas ego

p.365.13: 1. まず最高の悟りに対する心を生じてから、

→ 1. まず悟りに対する最高の心 (菩提心) を生じてから、

p.365.14: 悟りの核心においてブッダは魔天 (māra) を征服した。

→悟りの場 (菩提樹下) においてブッダ [となり] 魔天 (māra) を従えた。

p.365.22-23: 4. 清らかな草原で (ne siñ dag tu) … (bsñel so mdzad pa) の時、ハルマンジュの地 (halumañdzu) [で] 蜂蜜を贈ってから、井戸で死んだ 33 の人 [に] 慈悲を生じるところの聖地に礼拝します。

→ 4. 草原で (*śādvaleṣu) [ブッダが] 物思いにおふけりになっている時、[猿王] ハヌマット (Hanumat) (脚注追加) が蜜を捧げてから、井戸で死んで三十三 [天に] 生まれた。慈悲を生じるところの聖地に礼拝します。

(脚注) 本文の表記は *halumañdzu* であるが、『青史』には *halumanta* という表記があり (Roerich, G. N. (1949) p.219.35, Lokesh Chandra (1974) Nā8a1(197.1))、ともに Hanumat を指したものと思われる。

- p.365.24: ブラフマン (Brahman)
→ 梵天 (Brahman)
- p.366.3: 余すところなく尽くし、断じた、寂滅した勝利者の
→ 余すところなく制圧した、寂滅した勝利者の
- p.366.6-7: 8. 無常な命あるものを従えようと考えて、天から降りてきて、あらゆる行為の淵で (行為を
尽くし)、チュンダー (Cundā) による饗応から
→ 8. 無常な命あるものを従えようとお考えになって、天から降りてきて、あらゆるご行為の最後に、
チュンダ (Cunda) による饗応から
- p.367.1, 3: *Dvādaśakāra nāma nayastotra*
→ *Dvādaśakāra-nāma-nayastotra*
- p.367.note571: *dvādaśakāra nāma nayastotra ego / dvīdaśakāra nāma nayastotraṃ P, D / dvīdaśakārā
nāma nayāstotraṃ N, C, S*
→ *dvādaśakāra-nāma-nayastotra ego / dvīdaśakāra-nāma-nayastotraṃ P, D / dvīdaśakāra-nāma-
nayāstotraṃ N, C, S*
- p.368.note599: *bara ṇā se P, N, S*
→ *ba ra ṇā se P, N, S*
- p.368.16: *sku gduḥ mdzad*
→ *sku gduḥ mdzad*
- p.369.1: *bstod pa yi*
→ *bstod pa yis*
- p.369.note615: *yi P, N, C, S / yis D*
→ *yis D / yi P, N, C, S*
- p.369.6: *Dvādaśakāra nāma nayastotra*
→ *Dvādaśakāra-nāma-nayastotra*
- p.369.9-10: 2 資糧を満たす、その時 [そうした] 偉大な行為 [によって]
→ 2 資糧を満たされ、その時 [そうした] 偉大なご行為 [によって]
- p.369.11: 諸天を手なづける
→ 諸天を従えなさる
- p.369.12, 15, 17, 19, 21, 23, 25; p.370.2, 4, 6, 9, 12: 行為
→ ご行為
- p.369.20: 6. 輪廻の行為 (*bya ba*) に中核は存在しないことを
→ 6. 輪廻 [的存在] の行為 (*bya ba*) には実がないことを
- p.369.20: 天に向かってからも、
→ 天に向かった後に、
- p.369.24: 有益にするために、
→ 有益であったために、
- p.370.5: 3 つの世界 (現在、過去、未来)
→ 3 つの世界 (天界、空界、地界)
- p.370.8: 諭すために

- 促すために
- p.370.11: 舍利塔が作られることに
→舍利塔 (sku gduñ) をお作りになることに
- p.370.15: ナーガールジュナによって作られたものを
→ナーガールジュナがお作りになったものを
- p.372.11: 最高の犠牲を払う、
→最高の恩恵を与える、
- p.372.12: 三界のラマ
→三界の師
- p.372.19: それら (火など) による力を備えた、
→力を備えた、
- p.372.24: 死に
→住みかに
- p.373.1: ナーガールジュナによって作られたものを
→ナーガールジュナがお作りになったものを
- p.376.19-21:
1. 命あるものの利益は私への敬意であり、他の諸々 [に対する] 敬意ではない。
敬意もまた私にとって [のものであり] …その者に対して慈悲を投げ出さない。
[その者は] 慈悲を投げ出した行為によって卑しくなったけれど、
→
 1. 命あるものの利益は私への敬意 [から生じるの] であり、他の [どんな] 敬意 [から] でもない。
敬意もまた私にとって [のものであり] その者に対して慈悲を投げ出さない。
[その者は] 慈悲を投げ出した行為によって貶められたとしても、
- p.377.4: 徳性や聴くことや
→徳性や学問や
- p.377.10: 生じる敬意を受ける者 (pūjyaḥ) によって、
→生じるのが敬意を受ける者 (pūjyaḥ) であるから、
- p.377.12: 自我をもち (ātmika-),
→本質をもち (ātmika-),
- p.377.13-14: 作為的である (saṃskṛta-) としても、敬意を受ける者 (pūjyaḥ) に生じはしない。
→作為的 (saṃskṛta-) であれば、敬意を受ける者 (pūjyaḥ) には生じない。
- p.377.21: 私と命あるものたちが幸せと苦しみを同じように考えることによって、
→私と命あるものたちは幸せと苦しみを同じように考えるのだから、
- p.377.24: 真理 (arthah)
→目的 (arthah)
- p.377.26: ブッダ
→仏
- p.377.29: (sidhyatām)
→(sidhyata-)

p.377.note696: この句の

→この c 句の

p.378.note697: この句の

→この d 句の

p.378.13: 立てることによって、

→立てることによって (脚注追加)、

(脚注) bhavadbhiḥ が訳出されていない。

p.378.14: 執着する者たちに対して、

→執着する者たちに対して (脚注追加)、

(脚注) śrutvā śrutvā, viracitam が訳出されていない。

p.378.note703: この句の

→この d 句の

p.378.16: 『[菩薩の蔵である]「塩の河」』

→『[菩薩蔵経]の?』「塩の河」

p.380.13: 虫の力によってあるものが平原において結びつくように、

→虫の力によってあるものが平原において結びつけられる (?) ように、

p.380.14: 礼拝します。

→礼拝します (脚注追加)。

(脚注) このテキストのままでは意味不明。正しくは P no.2021 の第 5 偈の読みであろう。

p.380.22: ナーガールジュナによって作られたものを終わる。

→ナーガールジュナがお作りになったものを終わる。

p.382.29: 1-28

→ 1-8

p.383.9-12:

Aṣṭamahāsthānacaityastotra (P no.2025)

Verse	Tib.
1	8 9 9 9
2-3	9 9 9 9
4	9 10 9 9
5-8	9 9 9 9

↓

Aṣṭamahāsthānacaityastotra (P no.2025)

Verse	Tib.
1-8	9 9 9 9

p.383.13: *Dvādaśakāra nāma nayastotra*

→ *Dvādaśakāra-nāma-nayastotra*

p.385.note2: (脚注末尾に追加)

→本論文中では、他の著作のタイトルとの兼ね合いもあり、語末は語幹で表記 (-kārikā) することに統一して、この問題は保留しておきたい。

- p.385.14: *Mūlamadhyamakakārikāḥ*
→ *Mūlamadhyamakakārikā*
- p.386.note10: *ibid.* pp.155.18–156.2.
→ 加藤純章 (1983) pp.155.18–156.2.
- p.389.1, 19: *Mūlamadhyamakakārikāḥ*
→ *Mūlamadhyamakakārikā*
- p.389.6–7: ‘*Madhyamakakārikāḥ*’, ‘*Mādhyamikakārikāḥ*’, ‘*Mūlamadhyamakakārikāḥ*’, ‘*Mūlamādhyamikakārikāḥ*’
→ ‘*Madhyamakakārikā*’, ‘*Mādhyamikakārikā*’, ‘*Mūlamadhyamakakārikā*’, ‘*Mūlamādhyamikakārikā*’
- p.390.3: 齊藤明氏
→ 斎藤明氏
- p.392.23: 論理的
→ 議論の
- p.394.1: the destiny of thought
→ the density of thought
- p.409.25: 解もあり、真作性に
→ 解もあり (脚注追加)、真作性に
(脚注) Tola, F. and Dragonetti, C. (1995) p.13.32–36.
- p.413.note171, p.414.note173: Hahn, M. (1982*)
→ Hahn, M. (1982*)
- p.414.note180: *Mūlamadhyamakakārikāḥ*
→ *Mūlamadhyamakakārikā*
- p.421.13: *Pratītyasamutpādaḥṛdaya-kārikāḥ*
→ *Pratītyasamutpādaḥṛdaya-kārikā*
- p.421.note218: 本論文では *MK* のタイトル表記にならって、*-kārikāḥ* としておく。
→ *om.*
- p.425.17: *Abhisamāyālaṃkāra*
→ *Abhisamayālaṃkāra*
- p.437.10: *dgra bcos pa*
→ *dgra bcom pa*
- p.441.note353: Ishihda, Ch (1988)
→ Ishida, Ch. (1988)
- p.442.note357: *ibid.* p.3.20–21
→ 斎藤明 (2001) p.3.20–21
- p.445.25, p.446.11: *Dvādaśakāra nāma nayastotra*
→ *Dvādaśakāra-nāma-nayastotra*
- p.445.34–35: 言及にとどまるもので、おそらくナーゲルジュナ以前のものではないかという感が否めない。
→ 言及にとどまる。

- p.446.13-15: 第4番目に分類した5作品は、真作とはしたものの、ナーガールジュナ以前の可能性もあり、真作だとしても生涯のうち最初期の作品群といえるのではないだろうか。これら5作品を除いて、
→不明な点の多い、第4番目に分類した5作品を除いて、
- p.447.4-8: また、*RĀ*の第5章には二十頌の讃歌が組み込まれており、これを日常的に唱えることが勧められているが、これはナーガールジュナが讃歌にも関心を持っていたこと、かつ讃歌に対する社会的な要請があったことを示すものであろう。*CS*に含まれる4讃歌をはじめ、*Stutyatīstava*や*Niruttarastava*も、*RĀ*と同時期あるいはそれ以後に著されたものではないかと思われる。これら諸讃歌は
→*CS*に含まれる4讃歌をはじめ、*Stutyatīstava*や*Niruttarastava*などの諸讃歌は、
- p.451.9: (Conze, E (1954)の項目の前に挿入)
→張 保勝 (2001) see Zhang Baosheng(張 保勝).
- p.451.18: Śāntideva*
→Śāntideva
- p.452.3: Bibliotheca Buddica
→Bibliotheca Buddhica
- p.454.14, 16, 19: Hahn, M.
→Hahn, M
- p.457.21: Ishihda, Ch (1988)
→Ishida, Ch. (1988)
- p.459.16: (片野 道雄, ツルティム・ケサン (1998)の文献名)
→(Kaneko, R. and Matsunami, Y. (1979)の次の項目へ移動)
- p.464.15: 中村 元 (1964)
→中村 元 (1963)
- p.472.1: 勝呂 信静 (1964)
→勝呂 信静 (1963)
- p.472.12-13: (Takasaki, J. (1980)の文献名)
→(高崎 直道 (1976)の次の項目へ移動)
- p.473.17-19: (Takasaki, J. (1982)の文献名)
→(高崎 直道 (1985)の前の項目へ移動)
- p.437.20: (竹村 牧男 (1995)の文献名)
→(武田 浩学 (2005)の次の項目へ移動)
- p.473.21-28: (玉城 康四郎 (1977)から田中 公明, 吉崎 一美 (1998)までの文献名)
→(武内 紹晃 (1981)の次の項目へ移動)
- p.478.11-12: Wogihara, U. (1971) *Bodhisattvabhūmi, A Statement of Whole Course of the Bodhisattva (Being Fifteenth Section of Yogācārabhūmi)*, Sankibo Buddhist Book Store, Tokyo.
→Wogihara, U. (1936) *Bodhisattvabhūmi, A Statement of Whole Course of the Bodhisattva (Being Fifteenth Section of Yogācārabhūmi)*, reprint Sankibo Buddhist Book Store, Tokyo, 1971.
- p.480.5: 注釈書 *Akāṛīkā* の
→*CS* 注釈書の